

《一》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「練習日を増やす？」

聞き返したわたしのことを、穂乃花は、にらんだ。^① まちがいなく、にらんだ。

「みんなもわかってるよね？ 今年の合唱クラブが去年に比べて下手だった」

音楽室を見回した穂乃花に、^② 「そんなことないよ」と言う子はいなかった。

去年の自分たちより、声の広がり弱いような、歌っていてもどこか空回りしているような感覚が、みんなにもあるのだ。とどくはずの場所に、何度やっても手がとどかない感じた。

朝練後のミーティングは、一気にどんよりと濁った。^③ 練習のときから長谷川先生の注意ばかりで、もともたしい空気でもなかったのだけれど。

六月も後半に入り、梅雨も始まって、ただでさえ毎日雨模様で空気もジメジメしているから、よけいに嫌な雰^{ふん}囲気になる。

「^③ 去年と同じ練習量でダメなら、練習を増やすしかないでしょ？ 長谷川先生には、練習のない日も音楽室で自主練していいって、許可をもらったから」

「練習のない日に自主練って、要は学校がある日は毎日練習するってこと？」

勘弁^{かんべん}してよという顔で聞いたのは、アルトの勇人^とだった。

「塾^{じゅく}があるとか、習いごとがあるとかって言うんでしょ？ そういう人は、塾や習いごとがない日にしつかり自主練してください」

「いや、でもさあ……」

「塾も習いごともない日に練習したくないってことは、練習が面倒くさいってこと？」

勇人が押し黙る。穂乃花はたたみ掛けるように続けた。

「勇人さ、歯医者があるから土曜日の練習休んだけど、本当に歯医者だったの？」

「何だよそれ。サボったって言いたいのか？」

「^④疑われるような態度を取るのはいけないと思う。みんなもそう思わない？」

言い放った穂乃花の視線は冷たくて、聞いているわたしの背筋まで、ヒヤリとした。穂乃花の言葉に「そう思う」「サボりたがってるようなこと言うからだよ」と同調する声上がる。

でも、黙ることしかできない子も、何人もいる。穂乃花や、ほかの上級生、穂乃花の意見に賛成する同級生を前に、「練習日を増やすのには反対です」と堂々と言うなんて、無理だ。

そうやって、わたしは、わたしに言い訳をする。六年生なのに。気が進まない子を代表して、意見を言うことができる立場なのに。

むしろ卑怯だ、こんなの。わかっていて、黙ってやり過ごそうだななんて。

——言いたいこと我慢してまわりに合わせるよりは楽だし。

五月、夕暮れの商店街で藤野先輩が言っていたことが、ふと落ちてくる。雨がぱらつく空から、天井をつき抜けて、わたしの中に。

「とにかく、七月から練習日を増やすから。塾や習いごとがない日は必ず参加してください」

そう言っ、穂乃花はミーティング終了の号令をかけた。直後、チャイムが鳴る。朝の会の始まりを告げるチャイムだ。みんなは慌ただしくランドセルを背負って、音楽室を出ていった。

カギ閉め当番の子からカギを預かって、わたしは穂乃花を呼び止めた。

「ねえ、穂乃花。練習日を増やすって話なんだけどさ」

立ち止まった穂乃花が、^⑤ぎこちなく、ふり返る。

「もう一回、考え直してみてもいいんじゃないかな？ 毎日毎日合唱ばかりじゃ、しんどくなっちゃう子もいると思うんだ。息抜きも必要っていうか——」

「なに？ 真子も『ゆとりがほしい』みたいなこと言うの？」

ああ、やつぱり。こういう反応をされてしまうんだ。

ミスをした子を責めるような顔と口調で、穂乃花は「パートリーダーなのに、真子には何も見えてないんだね」と言い捨てる。

「ゆとりを持って練習するとか、みんなで楽しく練習するとかってき、上手な人がやることでしょ？ わたしたちは、去年金賞を取れなくて、しかも今年は去年よりずっと下手なんだよ？ ゆとりなんて言ってる場合？」

「でも……」

「わたしたちは、頑張^{がん}って、うまくならないといけないんだよ。去年、先輩たちとも約束したじゃん。今年は絶対に金賞を取るって」

「それはわかってる。わかってるよ」

「それとも、真子もサボりたいの？」

どうすればいいんだろう。穂乃花に「それはちがうよ」と言いたいのにな、何が、どうちがうと云えばいいのか、^⑥わたしの中に言葉がない。

そのとき、音楽室の引き戸が静かに開いた。古びたレールの上を戸が滑^{すべ}り、きゆるっ、きゆるっとな音を立てる。光をよく集めるアーモンド形の目が、こちらをのぞきこむ。

「すみませーん、一時間目、五年二組が音楽で使うんですけど」

素知らぬ顔で「入ってもいいですか？」と笑った朔^{はしめ}くんに、穂乃花が時計を確認^{にん}する。

「やば、朝の会終わるじゃん」

寝坊した日のお父さんみたいな顔でつぶやいた穂乃花は「じゃ、そういうことだから」と話を無理矢理切り上げた。

「パートリーダーの真子がそんなじゃ、みんな気がゆるむでしょ。自覚持つてよ」

ランドセルを背負い直し、穂乃花は駆け足で音楽室を出ていく。入れ替わるように、朔くんのクラスの子が続々とやってきた。

「カギ、預かろうか」

朔くんが、わたしが握りしめていた音楽室のカギを指さす。「ああ」と「うん」と中間の相づちを打って、カギを手渡した。

「陰悪って感じだったね」

「穂乃花は部長だから、コンクールのプレッシャーを人一倍感じてるだけなんだよ」

「でも、それで他人を傷つけたり、まわりの人の負担になることをしてもOKってことにはならないんじゃないの？」

朔くんの言葉に、わたしはX。

さっき、穂乃花にそう言えたらよかったのかもしれない。

「大体さ、どうしてそんなに全国大会で金賞を取りたいわけ？」

「そりゃあ、去年取れなかったからだよ」

「金賞を取れないと、真子ちゃんはどうなるわけ？」

「どうなる、って……」

合唱クラブで活動して、コンクールに出てるんだよ？ いい成績がほしい、みんなで「やったー！」って言い合いたい。

当たり前にそう思うのは、おかしい？

言葉にできなかった。でも、朔くんには思っていることが伝わってしまったらしい。

「俺おれから見るとね、真子ちゃんたちが、どうして金賞にこだわるのか、よくわからないんだよね。だって真子ちゃんたち、合唱クラブじゃなくて、コンクールで金賞を取るためにつらい思いをするだけのクラブになってるじゃん」

「ちがうんだよ！」

自分が思っていたより、ずっと大きな声が出てしまった。音楽室に集まっていた五年二組の子の視線が、いつせいに、わたしと朔くんに集まる。

「合唱団で楽しく歌ってるだけの人にはわからないだろうけど、全国大会に行くとか金賞を取るとか、わたしたちにとつては、大事なんだよ。そのために頑張ってるんだよ」

言ってから、朔くんの言葉が正しいんだと思ひ知る。

⑦ 本当のことを言われたから、とつさに「ちがう」と否定したくなってしまう。見たくないものを、必死に両手でぬぐうみたいに。

朔くんは、大きな目をさらに大きく開いて、わたしを見つめていた。

見ないでよ。そう、ふり払はらいたくなってしまう。

「真子ちゃんってさ」

あのきれいなボーイ・ソプラノを響ひびかせる口が、わたしの名前を呼ぶ。

「楽しくやるってことを、頑張らなくていいことだと思ってるよね。根っこのところ、あの怖い部長こわさんと同じだよ」

朔くんの声に、怒いかりはにじんでなかった。とても静かで、これから歌でも歌うみたいに冷静だった。なのに、

するどくて胸がヒヤリとする。

「朔、どうしたの？」

教室の前の方にいた男の子が、朔くんを呼んだ。どうやら朔くんの友だちらしい。五年二組の担任の先生が「授業始めるぞー」と入ってきてしまい、わたしはあわてて音楽室を飛び出した。

ホッとした。^⑧朔くんから、逃げる口実ができた。

(額賀 澤『ラベントとソプラノ』岩崎書店)

問一、——線部①とありますが、この時の穂乃花の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、朝練の時に注意を受けたことで、長谷川先生に対する怒りを感じている。
- イ、自分がおこったふりをしていれば、だれも反論しないと思っている。
- ウ、わかりやすく発言したはずなのに理解してもらえずうんざりしている。
- エ、最上級生なのにのんきなことを言う真子の態度を腹立たしく思っている。
- オ、自分の意見が正しいと思っていたのに聞き返されていらだっている。

問二、——線部②とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、穂乃花のことがこわかったから。
- イ、穂乃花の言うとおりでと思ったから。
- ウ、練習を増やすことには反対だったから。
- エ、もともといい雰囲気ではなかったから。
- オ、穂乃花の話をうわの空で聞いていたから。

問三、——線部③とありますが、穂乃花はどうして練習量を増やしたいと考えたのですか。三十字程度で説明しなさい。

問四、——線部④とありますが、それが具体的に書かれている一文を文中からぬき出し、初めの五字で答えなさい。

問五、——線部⑤とありますが、この時の穂乃花の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、朝の会が始まってしまったので非常にあせっている。
- イ、急いでいたのでだれに話しかけられたかわからず困っている。
- ウ、あまり親しくない真子に急に話しかけられてとまどっている。
- エ、練習日のことについて文句を言われるだろうと思っている。
- オ、反対ばかりする真子とはあまり話したくないと思っている。

問六、——線部⑥とありますが、この時真子が伝えたかったのはどのようなことだと考えられますか。それが書かれた一文を文中からぬき出し、初めの五字で答えなさい。

問七、Xに入れるのに最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、息をころした

イ、息をついた

ウ、息をのんだ

エ、息をひそめた

オ、息がきれた

問八、——線部⑦とありますが、「本当のこと」とはどのようなことですか。それが書かれた一文を文中からぬき出し、初めの五字で答えなさい。

問九、——線部⑧とありますが、真子はなぜ朔から逃げたかったのですか。最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、朔に自分の態度をきびしく責め立てられて困っていたから。
- イ、自分の言いたかったことを朔に誤解されて悲しかったから。
- ウ、朔にひどいことを言ってしまったが謝らずにすむと思ったから。
- エ、朔のするどい指てきにどう返したらよいかわからなかったから。
- オ、自分が何を言っても朔がわかってくれないことに嫌気が差したから。

問十、あなたが好きで取り組んでいることは何ですか。その時に心がけていることとその理由も答えなさい。

《二》 次の 1 ～ 5 の ― 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1、メガネをかける。
- 2、ハイユウを目指す。
- 3、身長をソクテイする。
- 4、タンサン飲料。
- 5、奈良公園のシカ。

《三》 次の 1 ～ 5 の ― 線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1、幸いにも間に合った。
- 2、八百屋へ行く。
- 3、鉄鋼を使った製品。
- 4、文字を拡大する。
- 5、漢字を訓読する。

《四》 次の1～4の言葉をそれぞれ省略せずに書きなさい。

- 1、学割
- 2、家裁
- 3、プレゼン
- 4、スケボー

《五》 次の1～5の にあてはまる言葉を後のア～キの中から選び、記号で答えなさい。

- 1、大雪が降った。 電車は予定通りとう着した。
- 2、兄は運動神経が良い。 歌も上手だ。
- 3、私は一生けん命勉強した。 見事合格した。
- 4、えん筆 シャープペンシルを持参すること。
- 5、私の母の妹、 おばが遊びに来ています。

ア、そのうえ	イ、ところで	ウ、つまり	エ、しかし
オ、それで	カ、なぜなら	キ、または	

《六》 次の 1 ～ 4 の ― 線部の言葉が正しければ○をつけ、まちがっていればひらがなで正しく直しなさい。

- 1、おうぎを使ってダンスをする。
- 2、友だちへボールをほおる。
- 3、急いでいたのでやむおえずタクシーに乗った。
- 4、みかんのかんずめを開ける。

《七》 次の 1 ～ 3 の □ にはそれぞれ漢字一字が入ります。後の 【 】 の中から二つを組み合わせて、それぞれあてはまる漢字を作りなさい。

(例) □ をたてずに歩く。

【立・求・王・日】 ↓ 音

- 1、赤い □ を引く。
- 2、□ を育てる。
- 3、長い □ を切る。

【糸・虫・支・天・木・泉】